

# キェルケゴールの新版原典全集(SKS)の特徴と意義について

鈴木 祐 丞

## 序

19世紀デンマークの宗教哲学者セーレン・キェルケゴール（1813–1855）生誕200年の節目の年にあたる2013年の2月22日、1997年の第1巻の刊行以来出版が重ねられてきたキェルケゴールの新版原典全集（SKS<sup>1</sup>）全28巻の刊行が完結した。本稿では、この新しい全集の特徴と意義をまとめてみたい。

## 1 SKS とは何か

まず、SKS とはそもそもどのような本であるか、またその刊行がどのような経緯をたどってなされてきたのかを簡潔にまとめてみたい。

SKS（*Søren Kierkegaards Skrifter*）とは、上述のとおり、キェルケゴールの新版原典（デンマーク語）全集<sup>2</sup>のことである。キェルケゴールの著作全集の第4版に相当するとともに、かつ、日誌・遺稿集の第3版に相当する（この点について、詳細は後述）。本体（SKS）は28巻28冊、本体各巻に付随する注解書（SKS K）が28巻27冊（『あれか、これか』の注解書はSKS K 2–3として2巻分が1冊にまとめられている）、すなわち全28巻計55冊で、合計24,962ページ、注解は72,628個にのぼり、計25人の文献学者が19年の年月をかけて完成させた<sup>3</sup>。SKS とSKS Kのすべて（つまり55冊）を積み重ねると、およそ2メートルの高さに達する。SKS は書籍版だけでなく、電子版でも刊行がなされており、電子版でも計28巻の刊行がやはり2013年に完結をしている。ちなみに、区別をつける必要がある場合には、書籍版はSKS B、電子版はSKS Eと表記することになっている。

1990年ころから、既存のキェルケゴールの著作全集および日誌・遺稿集への不満が高まり（後述参照）、新版の刊行の要望が高まった。来るべきキェルケゴール生誕200年を見据えて、新しい版の出版のための財政的支援の訴えが、オーデンセ大学教授のF. H. モーテンセンらによって、デンマーク文部省に対してなされた<sup>4</sup>。1994年から、コペンハーゲン大学セーレン・キェルケゴール研究センターにおいて、当時のセンター長であったN. J. カペローンを中心として、編集作業が開始された。以来およそ1億6500万クローネ（1クローネ＝17円として、およそ28億円）の公的資金がつぎ込まれ<sup>5</sup>、上述のとおり、1997年に第1巻が刊行されたのを皮切りに、

<sup>1</sup> *Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1–28, K1–28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, København: Søren Kierkegaard Forskningscenteret og G. E. C. Gads Forlag 1997–2013.

<sup>2</sup> この新版原典全集の日本語での呼び名はまだ定まっておらず、本稿ではSKSと呼ぶことにする。

<sup>3</sup> *Kristeligt Dagblad*, 2013年2月22日号参照。

<sup>4</sup> Finn H. Mortensen, *En Kritisk Udgave af Søren Kierkegaards Tekster på Database og i Bogform. Et Pilotprojekt*（フィン・H・モーテンセン「キェルケゴールのデンマーク語テキストの問題とその再構成について―批評的新版の刊行を求めて」、橋本淳訳、『神学研究』第40号、1993年、pp. 103–141）。

2013年2月をもって全28巻計55冊の刊行が完結した。ちなみに、2005年のアンデルセン生誕200年の祝典には、約2億3000万クロネ（同じく約39億円）の予算が組まれたとのことである<sup>6</sup>。

## 2 SKS の特徴と意義

それでは、このようにして刊行が完結したSKSには、どのような特徴があり、その特徴にどのような意義が存するのであろうか。

結論を先取りすれば、SKSには、①キェルケゴールが書き残したもので知られているものすべてを、②キェルケゴール自身が整えた状態にできるだけ忠実な仕方でも収録している、という特徴があり、そのようなものとしての意義が存する。

以下では、SKSにこうした特徴が存するという点、また、こうした特徴を有することがどのような意義を持つのかを浮かび上がらせるために、次のような手順で論を進めたい。まず、（1）キェルケゴールが何を書き残したのかをまとめる。次いで、（2）それらがこれまでにどのように出版されてきたのかを確認する。そして、（3）それらこれまでの出版物にどのような問題点があるのかを整理する。その上で、（4）SKSの特徴①と②と、それらが持つ意義を解説したい。

### （1）キェルケゴールが書き残したもの

キェルケゴールが書き残したものの全体は、次の4つのカテゴリーに分類することができる<sup>7</sup>。

- （a）キェルケゴール自身が出版した作品（著作や新聞論文（それらの草稿も含む））。1834年の最初の新聞論文から1855年の『瞬間』第9号に至るまでのもので、著作約30作品、新聞論文計35本にのぼる。
- （b）キェルケゴールの手によっては出版されなかった作品（著作や新聞論文（それらの草稿も含む）。キェルケゴール自身が出版の準備を整えながらも死後にはじめて出版されたもの（『わが著作活動の視点』など）と、キェルケゴール自身が出版の準備を整えきれなかったもの（『アドラーの書』など）があり、あわせて約10作品にのぼる。
- （c）日誌、研究ノート、紙片など。日誌は「AA」から「KK」および「NB」から「NB36」と題された合計46冊のノートのことであり、研究ノートは合計15冊ある。これら以外に、何らかの理由で綴じられたノートにではなくばらばらの紙片へなされた書き込みが相当量存している。
- （d）手紙、献辞など。

### （2）SKS 以前の出版物

SKS以前には、このようなキェルケゴールが書き残したものの全体を網羅的に収録した全集は存在せず、その全体が、著作群、日誌・遺稿群、その他という系列に分けられて、それぞ

<sup>5</sup> *Politiken*, 2013年2月20日号参照。

<sup>6</sup> *ibid.*

<sup>7</sup> SKS, Forord 参照。

れの系列で出版が重ねられてきた。

まず著作群について言えば、SKS 以前には三つの全集が存した。『原典全集』第1版 (SV 1)<sup>8</sup> は1901年から1906年にかけて出版された14巻本である。『原典全集』第2版 (SV 2)<sup>9</sup> は1920年から1936年にかけて出版された15巻本で、第1版の編集をほぼそのまま踏襲しつつ、新たに用語解説・インデックスを第15巻として付したものである。SKS 登場以前は、この第2版が国内外のキェルケゴール研究において通常使用された基本テキストであった。『原典全集』第3版 (SV 3)<sup>10</sup> は1962年から1964年にかけて出版された20巻本で、第2版を底本としてそれに多少の校訂と本文批評を加えたものである。

日誌・遺稿群については、SKS 以前に二つの版が存した。『日誌・遺稿集』初版 (EP)<sup>11</sup> は、1869年から1881年にかけて出版されたもので、9巻本である。『日誌・遺稿集』第2版 (Pap.)<sup>12</sup> は、もともとは1909年から1948年にかけて出版され、計11巻であった。1968年から1978年にかけて、これに補遺とインデックスを付して計16巻本として複製された。日誌・遺稿群に関しては、SKS 以前は、この第2版 (Pap.) が研究において主に用いられていた。

これら著作群および日誌・遺稿群の他に、1857年に刊行された『新聞論文集』(Bl. art.)<sup>13</sup> と、1953年に刊行された『手紙と資料文書』(B&A)<sup>14</sup> が存する。『手紙と資料文書』(B&A) は、上記『日誌・遺稿集』第2版 (Pap.) への補遺という位置づけである<sup>15</sup>。

### (3) SKS 以前の出版物の問題点

分量的には、キェルケゴールが書き残したもの (a) から (d) の (うち草稿を除く) ほぼ全て<sup>16</sup>が、上記の SKS 以前の出版物によってカバーされている。このことを認めた上で、それらの出版物に存する問題点を洗い出してみると、それらが非統一的であったことと、それらの

<sup>8</sup> *Samlede Værker*, bd. I–XIV, udg. af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, København: Gyldendalske Boghandels Forlag 1901–06.

<sup>9</sup> *Samlede Værker*, bd. I–XV, 2. udg. ved A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, bd. XV “Sag–og Forfatterregister” ved A. Ibsen og “Terminologisk Register” ved Jens Himmelstrup, København: Gyldendalske Boghandels Forlag, Nordisk Forlag 1920–36.

<sup>10</sup> *Samlede Værker*, bd. 1–19, 3. udg. ved Peter P. Rohde, bd. 20 “Terminologisk Ordbog” ved Jens Himmelstrup og “Sammenlignende Register,” København: Gyldendal 1962–64.

<sup>11</sup> *Af S. Kierkegaards Efterladte Papirer*, udg. af H. P. Barfod og H. Gottsched, bd. I–IX, København: C. A. Reitzels Forlag 1869–1881.

<sup>12</sup> *Søren Kierkegaards Papirer*, bd. I–XI, 3. udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, København: Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag 1909–1948; Anden forøgede Udgave, bd. I–XI, 3, ved Niels Thulstrup, bd. XII–XIII (supplementsbind), udg. af Niels Thulstrup, bd. XIV–XVI *Index* af Niels Jørgen Cappelørn, København: Gyldendal 1968–78.

<sup>13</sup> *S. Kierkegaard's Bladartikler, med Bilag samlede efter Forfatterens Død, udgivne som Supplement til hans øvrige Skrifter*, udg. af Rasmus Nielsen, København: Reitzels Forlag 1857.

<sup>14</sup> *Breve og Aktstykker vedrørende Søren Kierkegaard*, bd. 1–2, udg. af Niels Thulstrup, København: Munksgaard 1953–54.

<sup>15</sup> SKS, Indledning, p. 10.

<sup>16</sup> 『手紙と資料文書』(B&A) の刊行後、様々な手紙や献辞が発見されている (N. J. Cappelørn, “Søren Kierkegaards Skrifter i Ny Udgave,” *Kulturbrev*, no. 9, 1996 (ニールス・J. ・カペローン「セーレン・キェルケゴールの新版全集の刊行」、橋本淳訳、『神学研究』、第45号、1998年、p. 85))。

編集が、キェルケゴールが整えた状態に必ずしも忠実ではなかったことの、二点に集約されるものと思われる。以下それぞれについて説明する。

SKS 以前には、キェルケゴールが書き残したものの全体を網羅的に収録した全集が存在していなかったわけであり、この意味で SKS 以前の出版物は非統一的であったと言える。この非統一性が問題であるのは、時にそのことが研究を円滑に進める上での妨げとなっていたからである。SKS 以前、キェルケゴール研究者は、『原典全集』第1版 (SV1)、『原典全集』第2版 (SV2)、および『日誌・遺稿集』第2版 (Pap.) を複雑な仕方で組み合わせて研究を進めざるを得なかった。というのは、『日誌・遺稿集』第2版 (Pap.) は『原典全集』第1版 (SV1) を引照するようにできており、その一方で研究者間で通用した基本テキストは『原典全集』第2版 (SV2) の方だったからである<sup>17</sup>。

SKS 以前の出版物に存する問題点の二点目は、それらの編集が、様々な仕方で、キェルケゴールが整えた状態に忠実ではなかったということである。

まず著作群に関してこの点を見てみる。『原典全集』第1版 (SV1) の場合、編集の底本として、手稿、初版 (キェルケゴールが生前に校正・出版した最初の版)、重版を組み合わせて利用しており、その意味でキェルケゴールが整えた状態に忠実ではなかったと言える<sup>18</sup>。『原典全集』第2版 (SV2) では、キェルケゴール自身の手稿にできる限り忠実にするという意図をもって編集がなされはしたものの、編集者の憶測にもとづいて初版を改変して手稿を再現しようとするなど、恣意的な編集がなされている<sup>19</sup>。また、やはり編集の底本が非一貫的であり、手稿を基本的な底本として用いつつも、それ以外の版も用いられていたことが確認される<sup>20</sup>。そして、キェルケゴール自身の手稿 (や初版) における実際の文や語句とは相違する部分が多数存在し、その上そのことについての注記が付されないケースが多く見られる<sup>21</sup>。『原典全集』第3版 (SV3) には、文章の脱落や語句の間違いなどの欠陥が多数見られる。なお、第3版は、このようなものとして、「長期の使用には耐えがたい劣悪な出版物であり、本来は刊行されてはならないはずのもの」<sup>22</sup>という評価が研究者の間では定着しており、研究において使用されることはほぼ皆無である。

次に、日誌・遺稿群に関して、SKS 以前の版の編集が、キェルケゴールが整えた原状に忠実ではなかったことを見てみたい。キェルケゴールの死後、彼の部屋で膨大な量の遺稿が発見されると、遺稿を構成するノート、紙片、ファイルなどのそれぞれが、部屋のどこにどのよう

<sup>17</sup> Mortensen (橋本訳), 1993, p. 113参照。付言すれば、モーテンセンによれば、研究者はまず入手しやすい『原典全集』第3版 (SV3) を購入することから始めるが、後述のようにそれが研究においては使用しえないということを知るようになるので、結局、『原典全集』第1版 (SV1)、第2版 (SV2)、第3版 (SV3) と、『日誌・遺稿集』第2版 (Pap.) を購入するという結果になることが多かった。

<sup>18</sup> Cappelørn (橋本訳), 1996, p. 85.

<sup>19</sup> Cappelørn (橋本訳), op. cit., p. 86.

<sup>20</sup> Mortensen (橋本訳), 1993, p. 116.

<sup>21</sup> ibid. p. 122.

<sup>22</sup> Cappelørn (橋本訳), op. cit., p. 86. 例えば、『死にいたる病』には、「この地上のものを失う [tabe] ことはそれ自体が絶望することではない」(SKS 11, 167) という一節が存するが、この部分が第3版では「この地上のものを手にする [tage] ことはそれ自体が絶望することではない」(SV3, 108) となっている。

にして保管されていたかが再現できるように、記録が作られた<sup>23</sup>。簡潔に言って、SKS 以前の日誌・遺稿集は、そのキェルケゴール自身が整えた分類の枠組みを無視してしまっているのである。『日誌・遺稿集』初版 (EP) では、編集者 (H. P. バーフォー) が、自らの抱くキェルケゴール像を読者に提示するという意図のもと、収録すべき日誌・遺稿の項目を自らの判断で取捨選択し、その上でそれらの項目を再配列するなどの作業を施した。また、バーフォーは、キェルケゴールが使用していた略語を元に戻したり、句読法を変更するなど、文章自体にも手を加えた<sup>24</sup>。『日誌・遺稿集』第2版 (Pap.) は、日誌・遺稿の全体を、A (日誌および紙片に書かれた記述)、B (刊行された著作に先立つ草稿類、あるいは出版されることのなかった作品の下書きなど)、C (読書の覚え書きや書物からの抜粋など) という三つのカテゴリーに分類した上で、それぞれのカテゴリー内の項目を年代順に配列して収録している。このような仕方では編集者の判断に基づいて再配列されて我々に提示された日誌や遺稿は、キェルケゴール自身が整えていたもとの分類の枠組みを、見えなくしてしまっているわけである。

この節では SKS 以前の出版物に存すると思われる問題点を確認してきた。研究に際して資料の問題が存在するのは、当然のことながら、キェルケゴールの場合に固有のことではない。他の多くの思想家の研究に際しても、研究者は様々な形で資料的問題に直面する。その一例としてニーチェ研究の場合を挙げてみると、やはりキェルケゴールの場合と類似した遺稿にまつわる資料的問題が存している。ニーチェ自身が何らかの仕方で出版を意図していた多数の遺稿が存在するのだが、彼の妹が恣意的と言えるような仕方でその遺稿を編集し、出版したのである。それが『権力への意志』というタイトルで知られる出版物であり、ニーチェ研究においては著作としての信憑性が疑問視されている作品である。編集者が遺稿を恣意的に編集して出版したという点で、このニーチェのケースは、キェルケゴールのケースと類似的であると言える。一方で二つのケースの間の相違点は、キェルケゴールの場合には、彼の遺稿の原状 (彼自身が整えた分類) を復元させるための資料が残されているという点である。上でも多少触れたが、キェルケゴールの遺稿の初期の管理人たち (H. Lund, H. P. Barfod) は、キェルケゴール自身が整えておいたままの分類を再現できるように、遺稿の目録を作成したのである。そして、日誌・遺稿群に関して言えば、その目録を手掛かりにして日誌・遺稿の原状を忠実に復元させようとしたのが、新版原典全集 (SKS) なのである。

#### (4) SKS の特徴と意義

上述の通り、SKS には、①キェルケゴールが書き残したもので知られているもののすべてを、②キェルケゴール自身が整えた状態にできるだけ忠実な仕方で収録している、という特徴が存する。以下では、これらの特徴を詳述し、前節までに確認してきた SKS 以前の出版物の問題点と対比させて、SKS の意義を浮かび上がらせてみたい。

<sup>23</sup> キェルケゴールの遺稿の原状と、それが彼の死後どのような経緯をたどって出版がされてきたかなどについて、詳細は Niels J. Cappelørn, Joakim Garff, Johnny Kondrup, *Skribtbilleder*, København: G. E. C. Gads Forlag, 1996 参照。

<sup>24</sup> Cappelørn (橋本訳), op. cit., p. 80. さらに言えば、バーフォーは、キェルケゴールの遺稿の実物自体にも、(切り貼りや書き換えなど) 様々な仕方で手を加えたという (ibid.)。

① 網羅性

SKS の序言の言葉を借用すれば、SKS とは、「キェルケゴールのペンにより書かれたもので見つけられているものすべてについての、完全に新しい出版物である。すなわち、キェルケゴールが出版した著作、彼が出版のための準備を整えていたが彼の死後に初めて出版された著作、彼が完全には準備を整えきれなかった作品、またそれら著作や作品の草稿のすべて、その他にも、日誌、ノート、紙片、そして手紙と伝記的資料」<sup>25</sup>を一元的に収録した出版物である。言い換えれば、「SKS は、これまで、三つの著作全集 (SV 1、SV 2、SV 3)、二つの日誌・遺稿集 (EP と Pap.)、手紙と文書 (B&A) として、ばらばらに出版されてきたものを集約したものである」<sup>26</sup>。こうした網羅性が、SKS の特徴の一つである。

こうした網羅性にどのような意義が存するののかというと、一点目は、研究における利便性の向上である。先述の通り、SKS 以前においては、研究者は、『原典全集』第 1 版 (SV 1)、『原典全集』第 2 版 (SV 2)、および『日誌・遺稿集』第 2 版 (Pap.) を複雑な仕方で組み合わせて研究を進めざるを得なかったのであるが、SKS は著作群および日誌・遺稿群を一元的に収録しているわけで、SKS の登場によって研究者はこのような種類の煩わしさから解放されることとなる。SKS の網羅性のもう一つの意義は、そのことが、キェルケゴール研究に質的な変化をもたらすということである。上で確認してきたように、SKS 以前の出版物においては、キェルケゴールが書き残したものは著作群と日誌・遺稿群などの系列に切り離され、それぞれの系列において出版が進められたのであった。このことは、キェルケゴール研究においては著作群こそが一義的な資料であり、日誌や遺稿は二義的なものにすぎないという風潮を生み出した。あるいは、こうした風潮ゆえに、二つの系列の分離的な出版という事態が生じたとも考えられる。いずれにせよ、SKS に至って、はじめて著作群と日誌・遺稿群が合流したわけであるが、このことは、こうした風潮を覆そうという SKS 編集者たちの意志の表現であるとともに、キェルケゴール研究において日誌・遺稿群が著作群と同等の地位を占めるべきであるという現在の国際的潮流の反映でもある<sup>27</sup>。

② キェルケゴール自身が整えた状態に忠実であること

SKS の特徴の二点目は、SKS が、キェルケゴール自身が整えた著作や日誌・遺稿の状態を忠実に再現しようとするものである。

著作群に関しては、まず、SKS は、初版 (キェルケゴールが生前に校正・出版した最初の版) を底本とすることを編集上の原則としている<sup>28</sup>。その根拠は、キェルケゴールにとっては、初版が出版された段階が本の完成を意味したと考えられることである。というのも、キェルケゴール存命中に重版が行われた場合でも、その際に彼は書き換えを行っていなかったことが知られているのである<sup>29</sup>。また、SKS は、どれほど風変わりな成語や語形、句読法であっても、基本的にキェルケゴールの用いた正書法をそのまま用いている<sup>30</sup>。

<sup>25</sup> SKS, Forord, p. 7.

<sup>26</sup> SKS, Forord, p. 7.

<sup>27</sup> Joakim Garff, “‘What Did I Find? Not My I’: On Kierkegaard’s Journals and the Pseudonymous Autobiography,” tr. by K. Brian Söderquist, *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2003, p. 112.

<sup>28</sup> SKS, Indledning, p. 7.

<sup>29</sup> Cappelørn (橋本訳), 1996, p. 89.

日誌・遺稿群に関しては、SKS では、上記のキェルケゴールの遺稿目録を手掛かりにして、キェルケゴール自身が整えた遺稿の全体的枠組み（日誌「AA」から「KK」、 「NB」から「NB 36」など）を再現することを編集上の指針としていて<sup>31</sup>、原理的に遺稿の原状の再現可能性が保証されている。

著作群においても日誌・遺稿群においても、キェルケゴール自身が整えた状態に忠実に編集を行うという SKS のこの特徴は、資料の客観性の確保という意義に直結する。すなわち、研究者は、編集者の意図という、正確な研究の遂行にあっては邪魔になる媒介を極力排した形で、キェルケゴールの書き残したものに接することができるようになったのである<sup>32</sup>。

## 結び

以上、本稿では、2013年に刊行が完結した、キェルケゴールの新版原典全集（SKS）の特徴と意義について考察を行ってきた。

研究という形でキェルケゴールと接するのでないならば、SKS を用いなくても特に問題はないと思う。SKS 以前の版を用いても、それによってキェルケゴールの思索の深さが損なわれることはないだろう。一方で、研究という形でキェルケゴールと接する場合には、つまり絶対的に確実な知識の創造の営みの場合には、基となる資料にも可能な限りの厳密さが要求されるはずであり、それゆえ SKS の活用は必須ということになるだろう。

さて、デンマークの新聞には、SKS に対する批判的な論調が散見される。一例を挙げれば *Politiken* に次のような記事がある。デンマークの地方の図書館では、キェルケゴールの『原典全集』第3版（SV3）が取り揃えられていて、そのうち『あれか、これか』が収録されている第1巻と第2巻は、年間で5回から9回ほど貸し出しされるのだが、それ以外の巻が貸し出されることはほぼ皆無である。ここから、SKS が刊行されたとして、国民にどのような恩恵がもたらされるかは、推して知るべしであろう、と<sup>33</sup>。批判のポイントは、先述のように SKS の刊行プロジェクトにかなりの国家予算が用いられたということと、それにもかかわらず、SKS が、キェルケゴールが用いている19世紀の古めかしいデンマーク語を、現代のデンマーク語に訳していないという点である<sup>34</sup>。

このような批判に答えて、SKS 編集責任者である N. J. カペロンは、次のように述べている。

キェルケゴール生誕200年にあたって、彼の作品をデンマーク人の手にもたやすことは重要ではあるが、それは彼の作品を現代のデンマーク語に直すことによってではない。そうしてしまうことは、大きな文学的喪失である。キェルケゴールは難しいとよく言われる。

<sup>30</sup> *ibid.* p. 90.

<sup>31</sup> Cappelørn, *op. cit.*, p. 95.

<sup>32</sup> 付け加えて言えば、SKS が詳細かつ新しい注解（すなわち SKS K）を持つという点も、SKS の特徴と意義である。これまでの著作集の注は、第一次世界大戦の時代の読者を念頭に付されたものであったため、時代にそぐわなくなっている（SKS, *Indledning* 参照）。

<sup>33</sup> *Politiken*, 2013年2月20日号。

<sup>34</sup> *ibid.*

しかし、私は、現代語訳するということには、ある種の知的な怠慢があると考えざるを得ない<sup>35</sup>。

カペローンは、別の個所で次のように述べている。引用して本稿を閉じることにはしたい。

通常あまりこういうことを強く経験することはないと思うのだが、この *SKS* 出版作業を通じて、私は、「理解」とは結果のうちに存するのではなくて、プロセスのうちに存するのだということを経験した。さて、結果が公となった今、その結果〔つまり *SKS*〕は、新たなプロセスへの跳躍台となることだろう。すなわち、キェルケゴールのテキストを解釈することという、次なる運動への。そこにはまた新しい理解が生まれることであろう。我々の眼前には、キェルケゴールの生き生きとしてラディカルな思考が、そして彼のテキストの読解に深く基づいた研究が待っている。この出版〔*SKS*〕について本当に素晴らしいのは、第一に、我々が信頼に値するテキストを作り上げたということであり、第二に、誰にとっても開かれたものを作り上げたということである<sup>36</sup>。

---

<sup>35</sup> *Politiken*, 2013年2月20日号。

<sup>36</sup> *Kristeligt Dagblad*, 2013年2月22日号。